

天文学と プラネタリウム

第 79 回



www.tenpla.net



高梨直紘 (東京大学)
平松正顕 (台湾 中央研究院)

今月のお題

天プラの10年

12月～2月までスカイプラネタリウム@六本木ヒルズ!



星ナビ創刊から10年、天プラ立ち上げから7年と少し、本コラム開始から6年半。天プラの宇宙はいまも加速膨張中。

今星ナビが創刊した 2000 年末、天プラはまだその形を持っていなかった。これと前後して、天文誌 SKY WATCHER が休刊、渋谷の五島プラネタリウムと池袋のサンシャインプラネタリウムが閉館し、気軽に天文に触れられる機会が失われるのではないかと危惧があった。このころ高梨は葛飾の博物館で、平松は国立天文台三鷹で、それぞれ天体観望会の手伝いをしていたから、天プラの形はまだないとはいえその下準備の期間だったと言えるかもしれない。2003 年に両者が大学院に入った後、天文学の面白さをより多くの人に知ってもらうにはどうするかという議論を数人の同期と戦わせた。五島やサンシャイン以外にも活発に活動しているプラネタリウムはたくさんある。そこ天文学を学ぶ学生を結べば、より魅力的な天文学の発信ができるに違いない。こうして、「天文学とプラネタリウム (天プラ)」が姿を現した。

学生 15 名、プラネタリウム関係者 3 名でスタートした天プラのメーリングリストを基盤に、お互いを知るためのプラネタリウム見学会を実施し、またプラネタリウム関係者の会合に飛び

こんで協力の方策を探ったりもした。幸いにも多くの場で天プラのような活動は歓迎され、ML の規模も次第に大きくなっていった。

天プラを大きく動かしたのは、2003 年末に佐賀で開かれたプラネ関係者の会合であった。これがなければ今の天プラは存在しなかったと言ってもいいかもしれない。アルコールの入った中で新たな天文普及の方策を放談するうち、トイレトペーパーに天文情報を載せるという奇抜な案が飛び出した。のちに天プラの主力アイテムとなる、Astronomical Toilet Paper (ATP) である。ネットを探せば印刷業者はすぐに見つかり、ありがたいことに数種の天文教材の作成計画と合わせて日産科学振興財団から助成金もいただいた。反響は極めて大きく、新聞地方面から育児雑誌、タウン誌、果ては世界的科学誌 Science とカナダ・フランスの天文雑誌にまで取り上げられ、天プラの知名度は (一部の間で) 飛躍的に向上した。そして、アイデアを実現することの重要さ、それは策を練れば不可能ではないということ、さらにそこから可能性が大きく広がっているということを肌で感じる事ができたことは、知名度向上よりも大



天プラ連載開始当初、天プラ宇宙のインフレーションが始まったころの筆者二人。これまでの教訓：「言葉にすると実現する (こともある)」

きな意味を持っていた。

その後の天プラは、サイエンスカフェや天文講演会といったオーソドックスな企画に止まらず、飛行場や高層ビルでの天体観望会、異業種との協力企画など活動の幅を広げてきた。その根底にあるのは、「天文学をいろんな角度からいろんな人と楽しみたい」という欲求。今後の展開にも、どうぞご期待ください。